油、鋼材の第一次加工品である。

輸移出品目は、建造船（完成品）、合板、セメントという点から、石油化学製品や精密機械等の高度の技術と設備を要求する製品と縁のうすい地方的特性をもつという点である。

その二は国際的、国内的取引の為に、大型船、小型船の航行と、地域内の旅客船と漁船及び観光船、レジャー用釣舟が入りまじって運航されている現状である。大雑把な言い方をすると、大分港の都会型、別府、佐賀関、津久見港の専用型、臼杵の併用型に比較して、複合型をしている港ということができる。その上経営形態から云って大企業と中小企業の関係に、公害が小企業や、地域に影響すると云うと、船舶運航面にも批難の声が大きく目立ち易くなるものである。

ごく最近の話では、臼杵市のセメント工業誘致や、延岡新港計画に地域住民が、とくに生活の本拠である漁場といったことで、猛烈な反対をしている。佐伯市の港湾に於いてもかなりの不満の声は長く続いている。が、先づは、旅客、漁船港、商業港、工業港の専用港の整理、つまり消極的保護的政策から、宿毛―佐伯間のフェリーボート敷設や、鵜見半島スカイラインの構想、木材野木場の高の斉島を崩しての埋立等の声を聞くとき、豊後水道の人にとらわれず、佐伯の特性を生かす積極的政策をするために、日本地図全体を見た中で佐伯の地域開発を研討する必要がある。九州と云う点からも県単位とはずして、東海岸特有の地域と考慮して、船舶の集結上の港と考えることである。何故ならば、海上運送は陸上運送の長所まで加わり、海上運送独得の利点が益々其の威力を発揮する時代が来たからである。

（この項終り）

史跡の探訪

松平一伯公と霊山寺

賛助会員　高橋　智

去る四月五日、佐伯史談会の一行十五名が大分市の霊山に登山したことは、前号小野美治氏の報告集にその間の記にある通りであるが、私が特に興味と覚えたのは一伯公と霊山寺の関係である。

一伯公（松平忠直）は越前（今の福井県）六十七万石の領主であって、乱行のはて年三十才の頃豊後の津守に配流され、台所料として捨扶持一万石を給され、慶安三年（一六五〇）九月十日行年五十六才にて歿している。

この津守における公の生活については少しも詳しいことは伝わっていないが、公の警護にあたっていた府内の城主竹中采女大正の家臣によって、その行状を録して幕府の執政土屋大炊頭に送った「忠直卿行状記」の中の一節によると、

「忠直卿当国津守に移らせたもうて後は、いささかの美々しきお振舞もなく安らけく暮され申し候。かねが御聞せられ候には、六十七万石の家国を失いつる折は、悪夢より覚めたらんがごとく、ただ清々しうこそ思い候え。生々世々国主大名などには再び生れまじきぞ。多勢の中に交り乍ら孤独地獄にも陥ちたらんがごとき苦難を受くることしばしばなりなぞ御せられ、御改易のことについてはいささかの御後悔なに見えさせられず候。」

つれづれの折には村年寄、僧侶などさえお手近く召し寄せられ、囲碁の御遊びなどあり、打ち興ぜさせたもう有様殿の紫玉にも勝る暴虐よなど噂せられたまい

し面影さらに見えたまわず、ことに津守の浄建寺の洗山老衲とはいと入魂に渡らせられ、老衲が「六十七万石も持たせたまえば誰も然王の真似などもしたくなるものぞ。殿の悪しきにあらず」など聞こえ上げるに、お怒りの様もなく笑わせたもう。末には百姓、町人の貧しきをさえお目通りにひきたまい、無礼に飾りなく申上ぐることを、いと興がらせたまえり。御身はよろずお慎み深く、近侍の者き慣み領民を愛撫したもう有様、六十七万石の家国失いたる無法の人とも見えず、人々が驚く思うこと今に止らず候。」

とある。

忠直卿とは家康の孫にあたり秀康の息子で、父秀康が慶長十二年四月薨ぜられた時は年わずかに十三で越前六十七万石の大封をつがれている。幼少の頃から父に似て癇癖がつよく、誰もこれを抑える者ごとなく、家老達はこの我侭幼主の意志を絶対のものにする癖がついていた。

忠直卿が大坂夏の陣に、越前三万の軍兵を率いて出陣したのは若冠二十才であった。血気にはやる若大将は、満身創痍の大坂城に対して最後の総攻撃をかける際は、大将ゑずから大身の槍をしごいて部隊の先頭にすすみ、ついにこの部隊が一番乗りの大功をあらわし、百に近い大小名のうち武功第一にあげられ、家康より、さすがは我孫だけあって、身の武勇は唐の樊噲にも打ちまさるとのお賞の言葉と共に、天下の名器初花の茶碗を賜わったと云う。その得意や思うべしである。

彼は幼少の頃より武芸を好み、弓馬槍剣の技倆は近習の者達をぐんぐん追いこして、家中の名ある武芸者達にもたちまち打ち勝つ程の上達を示すを常とした。そのことは自分が如何なる大名や家臣達よりも特別すぐれた才能を持ち、天下第一人者であるとの自信と誇りを持ったであろうことは止むを得ない。戦が終り越前北の庄に帰ってからは、昼間は若侍を集めて弓馬槍剣の大仕合を催し、夜は一大無礼講の酒宴を開くを常とした。

彼はある時、槍侍にたけた若侍を選めて、二組に別けて紅白の大仕合を催した。紅軍の大将は城主自身である。この仕合も乱戦の結果は紅軍の勝利に終った。

「殿、大坂夏の陣以来また一段の御上達き。」

と、家臣の言は、忠直卿きして他愛もなく上機嫌にして益々大盃を重ねた。がふと深酔を示風にまさんもひと、近習の一人をつれて泉水のほとりの四阿にはいって、ついうとうとしかけている時、あたりに人の気配がして何かひそひそ話が聞こえてくる。その声は白軍の大将小野田左近と副将の大鳥古丈夫の二人であった。

「殿の槍もいかい御上達じゃ……」

「以前程勝をお譲りいたすのに骨が折れなくなったわ」

彼はこの話によって弓馬槍剣すべての試合が、今で云う八百長試合であったことを始めて知ったのである。彼は生れてはじめて土足をもって頭上から踏みにじられたような心持がしたであろう。人間としての最高の御台から引ずり下されて、地上になげだされたようなショックを受けた。これによって考えてみると、今迄の華々しい勝利のかずかずがどこ迄本当か、どこからが嘘かわからなくなってしまった。それは自分が如何にも賞めあげられて家臣から軽く操られているかと思うと、孤独と不満の波が湧むのを覚えた。そればかりではない、天下の美女をあつめた大奥の女の愛情についても、只権力者に媚びる女の技巧に過ぎないのではないかと思うと、やるせない寂しさが感ぜられないわけには行かなかった。

それからの忠直卿の生活は荒廃にまかせ、乱行は目にあまるものがあったといわれる。しかしこの乱行もそう

長くは続かなかった。それは幕閣の執政土居大炊頭利勝本田上野守正純等によって改易の沙汰があり、すでに覚悟をきめていた忠直卿は、越前六十七万石を弊履のごとく捨てて、配所たる豊後の国津守に赴かれたのである。

道中、敦賀でていを髪して、法名を一伯と附けられ、時元和九年（一六二三）九月のことで、忠直卿三十才であった と云う。（ちなみに大分市に銘菓一伯と云うのがあるが、これが忠直卿の別号から取ったものと思われる）

その後に於ける忠直卿の生活は前記行状記の通りであるが、浮世のことを諦めた一伯公は深く仏道に帰依し、ことに霊山の十一面観世音を厚く信仰して、居館から程遠からぬ霊山寺に暇を見ては登山し、今に見られる日光陽明門をかたどった山門を寄進されたのである。

このことについては先般登山した際、霊山の和尚地立川先生より聞いた通りであるが、唯立川先生のご説明で少し違うと思われるところは飛来（トビク）の由来で、飛来は支那の山からと云っているがそうではなくて、豊鐘善鳴録巻の五（小野英治氏引用）に記されている。

「秋那伽は天竺の人なり。推古帝の季年はるかに支那をこえて日本に観す。豊後鶴田（ツルダ）山を望む。愕然嘆じて曰く、奇なる哉この山、恰も西域の鷲峰小嶺に似たり。」

とあり、この場合の西域は、大きく印度の北中部を含まれていることである。外にも印度北中部を西域と記されている書を時に見かける。（玄奘三蔵の西域記）

鷲峰小嶺とは霊鷲山のことで、釈迦が法華経を説いたところで、法華経序品第一に曰是の如く我聞き、一時仏王舎城耆闍崛山（ギシャクツ）の中に住したまい、大比丘衆万二千人と倶なりき・云々」の耆闍崛山こそ霊鷲山（リョウジュセン）のことである。

この耆闍崛山は、耶馬渓羅漢寺の山号でもある。

それで飛来山霊山とは、中印度マカダ国王舎城霊鷲山より飛来したとの意味と受けとれる。

悲劇の人忠直卿と、大分の新名所霊山寺とは、まことに因縁浅からぬものと覚える。尚居館や墓所などこの附近の史跡は更に詳しく、色々調べて見たいものである。

（住所 南津留郡本匠村三股・文化財調査委員）

探訪記

佐伯惟定の墓を尋ねて

―三重県津市の四天王寺をさぐるの記―

高木 吉

四月二十二日から三十日まで京阪に遊んだ。曙の結婚式に参列し、万博を見学することが主目的であったが、四月二十五日小閑を得て探訪を行った。同寺にある佐伯惟定以後の佐伯氏の人々の墓を訪ねたいと、かねてから念願していたが、やっとそれを果したわけである。同墓地には既に平田薇閣と小野会員が訪れている。

以下見聞のままを記して参考に供したいと思う。

京都駅から近鉄特急で津に向った。かなりの距離であるが快適にとばして、二時間あまりで到着した。

訪ねる四天王寺は駅から遠くないことも分った。雨が激しく、歩いてはずぶぬれになると見て車に乗ったので、一服する間もなく到着した。

寺は小丘を背にした静寂の地にあった。山門をくぐると、正面に本堂があり、右手に文化住宅様の庫裡がある。本堂も庫裡も簡素な建物である。後で聞いたことだが戦災で建物全部が焼失し、現在のものは戦後に再建したということである。

庫裡の玄関に声をかけると、応対に出たのは年配の婦人であったが、来意を告げてしばらく話すうちに住職夫人と分った。そして住職は